



草戸千軒発掘秘話 4

調査区の生き物たち

—オタマジャクシ、ウナギ、そしてライギョ—

草戸千軒町遺跡では、調査区内で様々な生き物との出会いがありました。これも、遺跡が芦田川の中州となっていたためです。

調査区内には、各所に「水たまり」ができることがあります。この「水たまり」で時々発生したのがオタマジャクシの群れ。しかし、この群れの中からカエルに成長したものは多くはありません。その理由は2つあります。

まずは、晴天が続いて徐々に水が蒸発していく「水たまり」もあります。ところが、オタマジャクシにはまだ足が生えておらず、別の場所へ移ることができません。このため、最後は「干からびる」ことになってしまいました。

また、ポンプで排水をしなければならない「水たまり」もあります。吸水管へはかなりの勢いで水が吸い込まれ、この水とともにオタマジャクシも引き込まれていきます。吸水口へ詰まったオタマジャクシは取り除くのですが、多くは絶命しています。

これらの息絶えたオタマジャクシを土に埋めながら、早くカエルになれば良かったのに、としみじみ感じたものでした。

さて、井戸の掘り下げを行っていた時、ウナギが現れたことがあります。ところが、掘り下げの時点で、井戸には水の流れは通じていませんでした。結局、ウナギはいったいどこから来たのか謎のままです。この井戸は昭和63年度に実施した第40次調査区で確認し、後にSE4110と名付けたものです。珍しいことに、この井戸の周りの地盤からは湧水が少なく、良好な状態での調査となりました。ウナギの登場とともに、めったにないことが重なったのです。なお、井戸底は海拔マイナス3mで、遺跡の中で最も深く掘り込まれたものになっています。

そして、大きな生き物として、ライギョも現れました。簡単には捕まえられず、ぬかるんだ地面の中に潜りこもうとします。調査区内ですから、そのままにしておくことはできません。しばらくの格闘の末、ようやく取り押さえることができました。体長を測ると90cmほどあり、その後、芦田川へ放しました。

このほか、孵化して間もないスッポンやザリガニなども調査区内に現れました。ザリガニは地面によく穴を開けるため、姿を現すと直ちに調査区の外へ追いやられていました。

こうした生き物との出会い、そして付き合いは、草戸千軒町遺跡の調査にあっては、「日常的な風景」の一つだったのです。



調査区に現れたライギョ —昭和60年7月—

(主任学芸員 下津間 康夫)